

「ほっと」活用のポイント

- ☑ 生徒一人一人が自己存在感を高めるための居場所づくり
- ☑ 生徒同士の人間関係形成能力の育成に向けた絆づくりの機会の提供

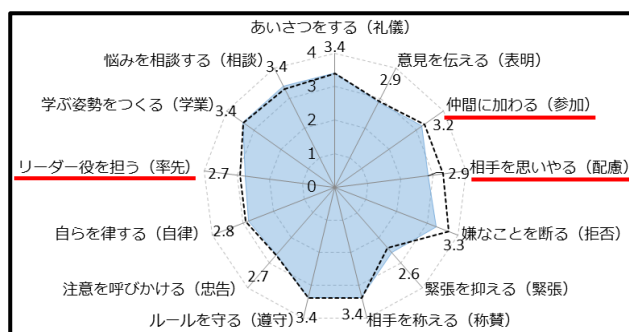
取組の実際

1 「ほっと」による傾向と分析

第3学年の生徒を対象に5月に「ほっと」を実施した。

【傾向と分析】

- ・「リーダー役を担う」の得点が低い
→これまでの人間関係や固定化された役割により、率先して活躍しようとする生徒が少ない。
- ・「仲間に加わる」「相手を思いやる」の得点が低い
→これまでの固定化された人間関係の維持を優先させてしまう生徒が多い。



2 分析結果に基づいた取組

- 「リーダー役を担う」の得点が全道平均と比較し低い、「相手を称える」が全道平均であったことから、各教科や諸活動での隠れがちな小さな頑張りを見つけ、学級全体で認める機会を位置付けた。
- 「仲間に加わる」「相手を思いやる」の得点が全道平均より低いことから、学校行事や各教科の授業において、様々な他者と関わる活動の充実を図った。

3 取組の成果

- 生徒がICT端末を活用して「振り返りシート」を記入したことにより、効率的に集計することができた。
- 各教科において、達成感を得られるよう学級全体でスモールステップによる課題を設定し、達成したら認め合う機会をもつことにより、9月に実施した「ほっと」では「リーダー役を担う」「意見を伝える」の得点が0.1点上昇するなど、自己存在感・自尊感情を高めることができた。
- 修学旅行や各教科の授業中のグループ活動において、生徒が様々な他者とかかわり協働的な活動ができるよう「意図的なグループ分け」「無作為なグループ分け」などを継続的に行ったことにより、9月に実施した「ほっと」では「仲間に加わる」の得点が0.2点上昇したり、「相手を思いやる」の得点が0.1点上昇したりするなど、人間関係を形成する力を育むことができた。

「ほっと」活用のポイント

- ☑ 分析結果を踏まえたソーシャル・スキル・トレーニングの実施
- ☑ 早期の問題認識の視点での分析と自己効力感の育成

取組の実際

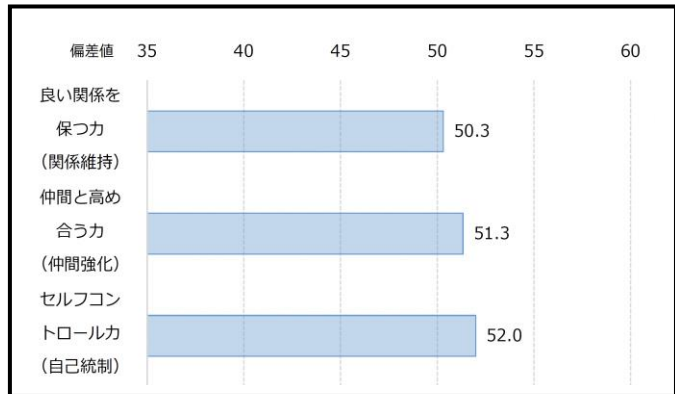
1 「ほっと」による傾向と分析

第1学年の生徒を対象として、5月に「ほっと」を実施した。

【傾向と分析】

- ・「緊張を抑える」の得点が全道平均より低い。
→校区内の3校の小学校から入学して間もない時期であり、人間関係が構築できておらず、緊張感をもって生活している。
- ・ソーシャルスキル尺度得点が全体的に低い。
→幼少期から小学6年生までずっと同じメンバーだったことから

ソーシャル・スキルが十分に育成されていない。



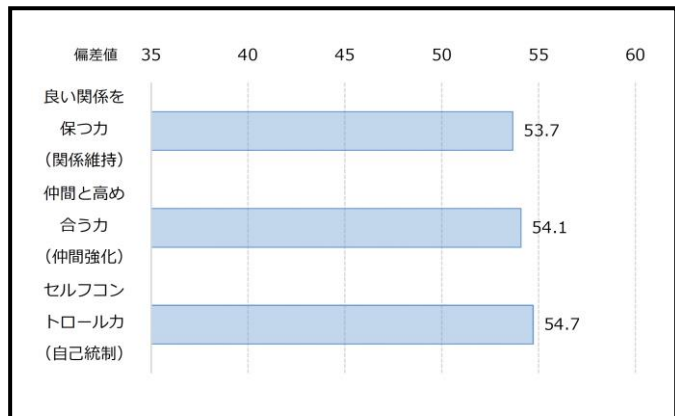
【「ほっと」の結果の一部（5月）】

2 分析結果に基づいた取組

同級生が数名という小規模校から入学した生徒の「緊張を抑える」の得点が低いことから、他者とコミュニケーションをとる力を育成するため、総合的な学習や道徳科の授業に**ソーシャル・スキル・トレーニングの手法**を取り入れた。また、教職員間で共通認識をもって**「自己効力感」や「情報を取捨選択できる力」の育成**に当たるようにした。

3 取組の成果

- 生徒がICT端末を活用して「振り返りシート」を記入したことにより、効率的に集計することができた。
- 「緊張を抑える」の得点が2.1（5月）から2.4（12月）へと数値が高くなった。
- **ソーシャル・スキル尺度得点が全体的に高くなった。** 関係維持が50.3→53.7、仲間強化が51.3→54.1、自己統制が52.0→54.7となった。
- 生徒が自分の気持ち等についてメタ認知するようになり、**ネガティブな思考をしていることに自ら気付く**ようになった。



【「ほっと」の結果の一部（12月）】